第5章　つくった人のこころ

朝食のあと、井上さんがダイニングテーブルで手紙を書いている。

以前に買いおきしていた便箋と封筒を、引っ越し荷物のなかから探しだして、お客たちからの問い合わせに答えることにしたのだ。

〔お便りを頂戴してから、だいぶ日にちがたってしまい、失礼いたしました。じつは、井上木工所は倒産しまして、二カ月前から、すべての業務を停止しております。お客さまに多大なご迷惑をおかけしておりますことを、ここにお詫び申し上げます。〕

ここまで書いて、井上さんは万年筆を置いた。

文面を読み返しながら、ほんとうにたいへんなことだな、と思った。

井上木工所が製作した家具は、いまでも、たくさんの人びとに使われているはずだ。

――お客さんたちは家具が気に入っただけでなく、井上木工所を信用して買ってくれたのだ。そのお客さんたちは、いまでも家具が壊れたら、ちゃんとアフターサービスをしてくれると思っているにちがいない。

会社の倒産で、その信用を裏切ることになってしまった。

せっかくの家具が壊れたりキズついたりしたときは、どうすればいいのだ。きっと、お客たちは途方に暮れるだろう。あきらめて新しい家具を買うことになるかもしれない。そうなったら、壊れた家具は捨てられてしまうのだろう。

井上さんは雑木林の端に投棄されていた家具類を思いだした。

――わたしたちが心を込めてつくった家具が、無造作に放りだされ、雨や風にさらされて、やがて腐ってバラバラになっていくわけか。

胸の奥から、淋しさとも悲しみともつかない思いがこみ上げてきた。井上さんはうつむいて、しばらく呼吸をととのえ、気持ちを静めようと努めた。

「どうかしたの、あなた?」

洗い物をしていた奥さんが心配そうに声をかけてきた。

井上さんは顔を上げて、なんでもないよ、と微笑んでみせた。

ふたたび万年筆を持って、つづきを書きはじめた。

〔お求めくださった家具が壊れたので直してほしいというご依頼ですが、もちろん可能なかぎりの修理をさせていただきたいと存じます。〕

ここで井上さんは、また万年筆をとめて文面を見直したが、すぐにうなずきながら書きつづけた。その顔には、ためらいや迷いの影はなかった。

〔それには破損状態を教えていただかねばなりません。簡単なスケッチに縦×横×高

さの寸法をご記入いただき、破損した部分を写真に撮って送ってくだされば、だいたいのことはわかるのですが、いかがでしょうか。破損状況を判断できましたら、修理の方法を検討したうえで、どうすべきかを改めてご相談いたします。東京周辺でしたら、こちらから出張いたしますが、そのための交通費は実費を頂戴いたします。〕

かつての井上木工所でも修理の見積もりを同じような方法で行なっていた。製品の大きさと破損状態を見たうえで、職人を出張させるか、輸送してもらうかを決めた。しかし、このアパートにライティングデスクや長椅子を運び込むことはできない。

――これは出張するしかないな。まあ、いいとするか。

どうせ暇な身体なのだから、と井上さんは苦笑して万年筆を握り直した。

〔それでは恐れ入りますが、写真とスケッチをお送りください。お待ちしております。もしも必要な場合は、つぎの電話番号へご連絡ください。〕

そのあとに一行あけて電話番号を書いた。これでまた着信音が鳴ることもあるわけだ。携帯電話を解約しなくてよかった、と井上さんは思った。

同じような文面の手紙を、もう一通書いた。これで転送されてきたハガキへの返事が、すべて終わった。お客の住所をあらためると、世田谷区、横浜市となっていた。

――やっぱり出張することになるな。

そう思ううちに、なんとなく出かけていくのが楽しみにもなってきた。

――ここで一日じゅう、ぼんやりすごしているより、どんなにいいか知れない。

井上さんは気力が盛り上がってくるのをおぼえた。さっそく散歩がてら、二通の手紙を投函しに出かけることにした。ガラス戸の外は風が吹きすさんでいる。雑木林の木々が大きくゆさぶられて、枝先にしがみついていた枯れ葉が、つぎつぎと飛ばされていく。

「こんな風のなかを、お出かけ?」

奥さんが、また心配顔で聞いてきた。

さっきから井上さんのようすをうかがっていたらしい。夫の行動を気づかっているような目つきだった。あるいは、はた目から見ると、不審な感じがするのかもしれない。

「だいじょうぶだよ。……なにも心配することはない」

井上さんは、わざと陽気そうな口ぶりで言った。

「少しずつだが、また、やる気になってきただけのことさ」

「そうならいいんですけど」

「きみこそ、少しは散歩でもしたらどうだね。……買い物まで洋子にまかせっきりじゃ身体にもよくないぞ。散歩に出ると、気持ちが晴れるんだがな」

「お買い物は、洋子がまとめ買いしたほうがいいって。……スーパーへクルマで行って、自分の家の分と一緒に買ってきてくれるんですもの」

いつしか奥さんは、とがめられた子どものような表情になっている。

井上さんは、それ以上はかかわらずにコートをはおって玄関を出た。

手紙を持った手が凍えるようだった。外気は冷たく、ときおり寒風が吹きつけてきた。

手紙と一緒にポケットへ手を突っ込んで歩きだすと、ふいに背後から声をかけられた。
「どうも。……お出かけですか？」
二階の近藤さんだった。
「おかげさまで、椅子、すごく快適ですよ」
「やあ、そりゃよかった」
井上さんは足をとめて、相手を見上げた。巨漢が分厚いダウンジャケットを着ているので、まるでマンモスのようだった。
「近藤さんも、お出かけですか？」
「ええ、郵便局まで」
「おや、わたしと同じですね。もっとも、こっちはポストで用が足りますけれど」
「ついでに投函してきましょうか？」
「いやいや、散歩もかねてるもんですからね」
「じゃあ、ポストまでご一緒しましょう」
近藤さんは楽しそうに言って歩きはじめた。
井上さんは相手の大きな歩幅に合わせて歩きながら、こりゃたいした運動になるぞ、と思った。——それに風除けには最高な連れだ。
「近藤さんのお仕事はパソコン関係だそうですね？」
そう聞いてから、思わずくびをすくめた。ひとの仕事のことをどうして知ってるんだ、

と反問されても仕方がない。まさか不動産業者から聞きだしたとも言えまい。

「ええ、ソフトをつくってるんですよ」

近藤さんは疑念を抱いたようすもなく率直に答えた。

「ほう、それはどういうものなんです？」

「パソコンというのはソフトがなければ、ただの箱と同じなんですよ」

と、近藤さんはわかりやすく話してくれた。

「まず基本ソフトというのがあって、パソコンでいろんな作業ができるようにします。そのうえで、たとえば文章を書くためのソフトや絵を描くためのソフトを入れます。……いまの時期なら年賀状をつくるソフトや確定申告のためのソフトなんかが必要でしょ」

「ははあ、それをつくっているんですか？」

「ぼくは専門会社に依頼されて、主に経理事務のためのソフトを制作してます。ときどきアルバイトで趣味のものもつくってますがね」

「アルバイトですか？」

「ええ、たとえばカレンダーをつくるソフトなんか、よく売れますね」

「自分でカレンダーをこしらえるんですか？」

「ええ、ぼくのソフトを使うと簡単にできますよ」

「それは、どこで売ってるんです？」

「インターネットですよ。……シェアウェアといいまして、五百円から千円くらいで売

ってます。いまも郵便局に振り込まれてきた代金から、一部を引き下ろしに行くとこです。北海道から沖縄まで、いろんなとこから振り込まれるんですよ」

「へええ、そんな商売があるとは知らなかったなあ」

井上さんは感心してつぶやいた。速く歩いているので、だいぶ息が上がっていた。

ようやく気づいた近藤さんが足をゆるめた。

「あっ、ごめんなさい。……で、井上さんは職人さんとかおっしゃってましたね」

「木工家具のね。ずいぶん前のことですけど」

「いまは、つくってらっしゃらないんですか?」

「ええ。……代わりに以前つくった家具の修理を引き受けようと思いましてね。じつは、そう思い立ったのは、あなたの椅子を直させていただいたおかげなんですよ」

井上さんは連れを見上げて笑ってみせた。

身体が温かくなっていて、脇の下に汗までかいていた。

二人は、まだしばらく話をしながら、寒風の吹くなかを歩きつづけた。

最初の手紙がきたのは、それから四日後だった。

引っ越しのときに階段から落としたのが原因で、長椅子の背がぐらついている、という内容のハガキをくれたお客からだ。

井上木工所が倒産したのを知らなかったので、無理なお願いをして申しわけない、とい

う丁重な手紙とともに、二枚の写真が同封されていた。

脚の部分に独特のカーブをもたせたつくりは、あきらかに井上さんが設計したものだった。およそ十五年前に発売されたベンチだ。

「やあ、懐かしいなあ」

井上さんは、しばらく写真に見入った。

「どれどれ、ははあ、背の支え板が外れかかってるんだな。これじゃ、子どもが寄りかかっても、ぐらぐらするだろう。……これは思ったより簡単に直せそうだ」

さっそく先方の都合のいい日に出張することにして、こちらから電話をかけた。

電話に出たのは、その家の奥さんらしく、すぐにでもきてほしいと言った。

「横浜までおいでいただけるんですってね。どうぞよろしくお願いします。なにしろ主人なんか、この長椅子に横になってテレビを観るのが大好きなもんですから」

と、嬉しそうに話した。

「いえね、この長椅子は初め主人が見つけてきたんですのよ。たしか西急デパートでしたわ。わたしも売り場へ見に行って、いっぺんで気に入っちゃいましてねえ」

費用の見積もりなど忘れたように、ひとしきり来歴をしゃべった。

井上さんは聞いているうちに、修理代などどうでもいいという気持ちになってきた。

――こんなに井上木工所の家具を気に入ってくださるお客がいるんだ。この話を、うちの職人たちにも聞かせたかったなあ。

もしかすると、すでに彼らは同じような話を何度も耳にしていたのかもしれない。当時は修理の要望が届くたびに、直接お客へ電話したり、修理に出向いたりしたのは、ほかならぬ職人たちだったのである。

——そうだとしたら、きっと職人たちは、いまのわたしと同じように、誇らしい気持ちで胸がいっぱいだったにちがいない。

電話を終えるとすぐに、井上さんは道具箱を持ちだして総点検をはじめた。

このあいだ近藤さんの回転椅子を修理したばかりだから、ほとんどは点検済みである。しかし、念には念を入れる必要がある。なにしろ今度は暇つぶしとはちがって、本格的な仕事なのだ。しかも、初仕事ときている。

さいわい右手の火傷は、ほとんど治ったようだ。試しにカナヅチの柄を力いっぱい握ってみたが、まったく痛みはない。これなら、だいじょうぶだ。

井上さんはカンナの刃をつぶさに点検したあと、やおら砥石を取りだした。錆びてはいないが、ちょっと気になる曇りを見つけたのだ。

——カンナは使わんだろうが、職人の魂を曇らせてちゃ、いい仕事はできんからな。

これまでにも年に一度は、かならず砥石に向かっていた。研ぎながら、職人の魂を曇らせるわけにゃいかない、と胸のうちで唱えていたのだった。

キッチンの一角に座れる場所をつくって、いそいそと砥石や水を入れた洗面器などを準備していると、玄関のチャイムが鳴った。

一部始終をソファから見守っていた奥さんが、ゆっくりと立っていった。
ドアを開けると、いきなり青白い顔の真也が飛び込んできた。
「リーリ、たいへんだよう」
と、いまにも泣きだしそうな声で叫んだ。
「チビが死にそうなんだ。……さっきから苦しがってるんだよう」
「よし、すぐ行ってみよう」
井上さんは道具や砥石などをそのままに、急いでコートを身につけた。
「で、チビは、どこにいるんだい？」
「うちなの。散歩に連れていこうとしたら、玄関でへたっちゃって、そのまんまなの」
「なんだ、電話してくれりゃいいのに」
「なんか、みんな、あわてちゃってるんだ。ぼく、自転車できたから」
「そうか。じゃあ、真也くんは先に行っててくれ」
そう言いながら振り返ると、後ろで奥さんが身支度をしていた。いつになく引き締まった表情だが、もはや目をうるませているようだった。
「戸締りを頼んだよ。……わたしも先に行ってるからな」
戸外は、あいかわらず寒風が吹きすさんでいた。表通りへ出ると、だいぶ先のほうを真也の乗った自転車が走っていく。井上さんは小走りで追いかけていった。
——とうとう逝ってしまうのかい、チビ。

風のなかで、井上さんはつぶやいた。すると鼻の先から顎へ冷たい滴がしたたった。
しばらく行くと、道路の先で真也が大きく腕を振っていた。早く、早くと叫んでいるようだが、風下にいるので声は聞こえない。ようやく家の前まできたところで、
「リーリ、リーリ。……チビが苦しそう」
と、真也が泣き声で言った。
「なんとかしてやって、お願い。……さっきママが獣医さんに電話したんだけど、もうダメだろうって言われたって」
その肩を軽く叩いてから、井上さんは玄関へ入っていった。
チビは上がりがまちに横たわっていた。身体の下にカーペットが敷いてある。チビの向こう側に座っている洋子と優香が、哀しげな表情で井上さんを見上げた。
チビは、ぐったりと頭をかたむけ、目を閉ざして、ほとんど息もしていない。ときどき胸を痙攣させたかと思うと、力なくガフガフと咳き込み、そのたびに思いだしたように腹部を二、三度だけ波うたせた。こころなしか、顔の全体が白っぽくなっていた。
「おい、チビ、どうした」
と、井上さんが顔を寄せて声をかけた。
「苦しいのか、そうか、そうか。……可哀そうにな」
「やっぱりダメなのかしら」
そばに座り込んでいた洋子がつぶやいた。

「獣医さんに容態を説明したら、何歳ですかって聞かれて。……十四年前に子犬のとき拾ってきたと話したら、その歳でフィラリア症じゃ、もうダメでしょうって」

それを聞きながら、井上さんは十四年前のことを思いだした。

――あの日も、今日のように寒い風が吹きすさんでいたなあ。

そのことを、はっきりおぼえている。とても印象的なできごとだったからだろう。

当時、井上さんの家には住み込みで家事をこなしてくれる若いお手伝いさんがいた。その人が買い物の帰りに、近所の駐車場で子犬が一匹うずくまっているのを見つけた。

「あの子、可哀そうに、捨て犬でしょうね」

帰宅してから、なにげなく話すのを聞いて、とつぜん奥さんが表へ飛びだしていった。

まもなく戻ってきた奥さんは、茶色い毛玉のような子犬を胸に抱いていた。

「あらまあ、拾ってらしたんですかあ」

お手伝いさんの声に、ちょうど家にいた井上さんはびっくりした。

もともと奥さんは犬や猫が好きでなく、幼いころの洋子が子猫を拾ってくると、

「いけません。もとのとこへ返してらっしゃい」

などと、おおげさなほど厳しく叱ったものだった。

それなのに奥さんは、お手伝いさんと一緒にはしゃぎながら、子犬にミルクを飲ませたり、抱き上げて頬ずりしたりで、大騒ぎだった。その夜は、親を求めてキュンキュン鳴きつづける子犬を、自分のベッドに入れて寝かせつけたりもした。

――あのころ、洋子が結婚したばかりだったので、きっと淋しかったんだろうな。
井上さんはチビから洋子へ目を移しながら、そう思った。
「あっ、エーバがきたよ」
優香の声で振り向くと、玄関ドアを開けた奥さんが息をはずませていた。
奥さんはチビのそばにしゃがみ込んで、その頭に手をのばした。
「チビ、だいじょうぶよ。……みんながついてるからね」
静かに撫でてやりながら、落ち着いた声で語りかけた。
「長いあいだ、ありがとう。……一緒に暮らして楽しかったね」
すると、チビが目を閉じたまま深い吐息をついた。声の主がわかったらしい。
ママ、ママ、と優香が小さな声でささやいた。チビのお尻のほうを指さしている。みんなが目をやると、かすかに尻尾が揺れていた。
「わかったのね、チビ、嬉しいわ」
と、奥さんが涙声で呼びかけた。
「抱っこしてやりたいけど、こんなに大きくなっちゃったからねえ」
そう言いながら、ゆっくりと頭を撫でつづけた。
優香が膝を進めて、両腕でチビの太いくびをそっと抱いた。
「チビ、大好きよ。……あんたは逃げてばっかりだったけど」
話しかけているうちに言葉が途切れて嗚咽になった。

チビの尻尾はまだ揺れていたが、徐々に力を失っていき、やがて動かなくなった。
「さよなら、チビ、ごくろうさん」
と井上さんが、いたわりを込めて言った。
それまで必死で耐えていたらしく、いきなり真也が大きな声で泣きだした。
「あんなに仲よしだったんだからね、いっぱい泣いておあげなさい」
奥さんがチビの頭を優しく撫でつづけながら、そう言った。

翌々日、井上さんは例のベンチを修理しに横浜へ出かけることにしていた。
朝の九時すぎに携帯電話が鳴った。
ひさしぶりの着信音なので、お客からかと思ったら、相手は洋子だった。
「お父さん、なんとかしてくれない？　真也がおかしいのよ」
「どうしたんだね。……おかしいって？」
「朝から部屋に閉じこもりきりなの。ご飯も食べないし、学校にも行きたくないって」
と、洋子は困り果てたという口調で訴えてきた。
「昨日、チビを運んでってもらったでしょ。……そのせいらしいの」
ははあ、と井上さんにも思い当たった。
——やっぱり、ちゃんと言い聞かせなきゃいけなかったんだな。
前日の午後、ペットの葬儀業者に頼んで、チビの遺体を運んでいってもらった。

死んだ日は、バスタオルにくるまれたチビを廊下の隅に安置して、ふだん使っていた餌皿にドッグフードを盛り、水も添えて、かたちばかりの通夜をした。井上さんをはじめ全員が手を合わせて冥福を祈った。

そのあと洋子がインターネットでペット専門の葬儀業者を探し、最寄りの業者に電話して、あとの処置を依頼した。前の家に住んでいるときだったら、広い庭のどこかに埋葬するところだが、いまはできない。けっきょく業者の手で火葬してもらうことになった。おそらく業者のもとへ集められた、ほかのペットたちの死骸と一緒に焼却されるのだろう。

「市役所に頼んで生ゴミとして扱われるよりは、どんなにいいか知れないわ」

と、ひそかに洋子は井上さんへ告げた。

業者のきてくれる時間は、翌日の午後と決まった。真也と優香が学校へ行っているあいだに運んでいってもらうことにしたのだった。

業者に依頼したことを、洋子は子どもたちには内緒にしておいた。チビがどこへ運ばれていき、どう処理されるのかを聞きたがるにちがいないと思ったからだ。

「それを怒ってるらしいの。……どうしてチビを勝手に連れてってしまったんだって」

と、洋子は困りきったように訴えている。

「いくらお葬式の専門家に頼んだんだって言ってもダメなの。それなら、ぼくもちゃんと見送ってやりたかったって。……優香はわかってくれたのに」

業者がチビを運んでいったときのようすを、井上さんは思い起こしていた。

二人連れの業者はチビの前に正座して丁重に拝んだあと、大きな遺体を大切そうに家から運びだした。ライトバンの後部座席に横たえてからも、また彼らは合掌した。

見送りに行った井上さん夫妻も洋子と一緒に手を合わせた。クルマが発進しても、奥さんは、チビ、チビ、と呼びかけていた。

「よし、わかったよ。……わたしが話してみよう」

と、井上さんは電話の向こうの洋子へ言った。

「これから横浜へ行くんだが、その前に、そっちに寄っていくよ」

そばで心配そうに聞いている奥さんへ、だいじょうぶだよ、とうなずいて見せてから、井上さんは玄関を出た。道具類を詰め込んだ旅行用の革製バッグを提げている。

表通りを歩きながら、さて、どうしたものか、と思った。

——真也くんには、まだチビの死が受け入れられないんだ。しっかり話してやらにゃ、いつまでも悲しみが尾を引くことになる。

しばらく深刻な面持ちで歩を進めていたが、家の前まで行くあいだに、だんだん表情がやわらいできた。とにかく率直に話すことだ、と気持ちを固めたのだ。

——しっかりした子だから、じっくり話せばわかってくれるさ。

玄関に出迎えた洋子が、困っちゃった、と眉根を寄せて階段の上へ視線を向けた。

「パパも話してくれたんだけど、ダメだったの。……お願いね、お父さん」

出勤しようとしていたらしい夫が、洋子の後ろで面目なさそうに会釈した。

いつものことながら、井上さんは思った。
——分子生物学者の目には、自分の家庭がどのように映ってるのかな。頭のなかの数字や記号と同じにしか見えないんじゃないのか。いったい洋子は、この男のどこに惹かれて結婚したんだろう。
彼は専門分野の博士号を持ち、大学では助教授だ。教授に昇格するのも、まもないだろうといわれている。しかし井上さんには、初めて洋子に紹介されたときから、いまだに世間知らずの勉強家だとしか思えない。
——まったく、自分の息子に言い聞かせることもできないとは。
胸のなかでつぶやきながら、井上さんは勝手知った二階へと昇っていった。
部屋のドアをノックして、リーリだよ、いいかね、と告げながらノブをまわした。ベッドの上でパジャマ姿の真也が起きあがり、暗い表情で見上げてきた。
「どうしたんだい、真也くん。……学校には行かないのか？」
井上さんは部屋のなかへ入っていき、ベッドの端に腰かけた。
「どこか具合でもわるいのかね？」
「……そうじゃないけど」
「今日は、サッカーの練習もあるんだろ？」
「……うん」
「練習も休むのかね？」

「……うん」
真也は頬をふくらませて消え入りそうな声で答えた。
「ぼく、……なんにもする気になんないんだ」
「そうか、チビのことでかね？」
「……うん」
「チビが死んでしまって、悲しいんだな？」
「うん。……チビ、おとといの朝まで、そこに寝てたんだ」
真也が腕をのばして、井上さんの足もとを指さした。
「なのに、……急にいなくなっちゃうなんて」
「そうだよな、がっかりしただろう」
「うん、身体じゅうの力が抜けちゃったみたい」
「そうだろうな、よくわかるよ。じつは、リーリも同じなんだ」
「それにさ、……ママったら、ぼくのいないあいだにチビを」
「リーリとエーバが真也くんの分も、ちゃんと見送ったんだよ」
「ぼくだって、もいちど、さよならって言いたかったんだ。なのに、ママは……」
真也はムキになって言いつのろうとしたが、井上さんが立ち上がって、
「よし、今日は学校を休んじゃえ。で、リーリと一緒に出かけよう」
と、いきなり言ったので、真也は目をみはった。

「えっ、……どこへ？」
「電車で横浜へさ。ちょっとした仕事をしに行くんだが、手伝ってくれんか？」
「……ぼくにできること？」
「ああ、できるとも。リーリの助手になってくれ」
そう言い残し、井上さんはさっさと部屋を出て、階段を降りてきた。
一階で成り行きをうかがっていた洋子夫婦が、どうでしたか、と聞いてきた。
「今日は学校を休ませるよ。これから、わたしの課外授業だ」
と、井上さんは有無を言わせない威厳をもって言い放った。
「きみたちは黙って真也くんを送りだしてくれ。いいかね？」
真也の両親は、あっけにとられた面持ちでうなずいた。
まもなく真也がジーパンにジャンパー姿で降りてきた。両親のほうへ顔を向けることなく、まっすぐに玄関へ向かった。スニーカーを履いている背中へ視線を送って、
「まあ、まかせといてくれよ」
と、井上さんは両親へ微笑みかけた。
二人が玄関を出ようとすると、ちょっと待って、と洋子がとどめた。
「駅前まで送っていくわ、いまクルマを出すから待ってて」
言いながら、あわただしく玄関脇の車庫へ向かった。
井上さんと真也が後部座席に乗り込むと、玄関から分子生物学者が飛びだしてきた。

「あら、パパを忘れてたわ」
わざとらしく笑いながら、洋子が助手席のドアを開けて待った。出勤する夫をクルマで大学の近くまで送っていくのが毎朝の習慣なのだ。真也は知らん顔をしていた。
クルマのなかでは黙り込んでいた真也が、駅前で両親と別れたとたん口をひらいた。
「いつも、あんなふうにママとパパは楽しくやってんだね」
「いいじゃないか、夫婦の仲がいいのは、素晴らしいことだよ」
「ぼくが、どんな気持ちかなんて、ちっともわかっちゃいないけどね」
と、ふてくされたように真也は肩をゆすりながら歩いた。
その細い背中を横目にしながら、井上さんは券売機へ向かった。硬貨を投入し、料金ボタンを押す段になって、ふと迷った。真也には大人券なのか、それとも小人券なのか。少しのあいだ考えてから、思わず苦笑してしまった。
――小学生だから、まだ子どもなんだよな。
電車に乗るとすぐ、真也は意外にも楽しそうに井上さんを見上げた。
「ぼく、電車に乗るのって、ひさしぶりだよ」
「ほう、そうかね」
「だって、毎日、学校には歩いて通ってるでしょ。それにサッカーの練習で忙しいから、電車で出かけることなんて、めったにないんだもん」
私鉄電車はラッシュアワーをすぎていたが、座席は空いていなかったし、吊り革の下に

立っている人もたくさんいた。二人はドアの近くにならんだ。
「ねえ、リーリ。横浜で、どんなお仕事するの？」
「家具の修理だよ。うちの会社でつくったベンチを直しに行くんだ」
「じゃ、やっぱりリーリは修理のお仕事、はじめたんだ」
「そうだよ、真也くんと約束したとおりにね」
井上さんが言うと、真也は嬉しそうに笑った。電車に乗る前と比べたら、まるで別人のような表情だった。井上さんは、ほっとした。
——チビへの思いから少しは遠のいたようだな。
さっき見た勉強部屋のようすを思いだしながら、そう考えていた。
——仲よしのチビが、いつもそばに寝そべってたんだからな。あの部屋に閉じこもってたんじゃ、なんにもしたくなくなるのも無理はないさ。
井上さんは右手に提げたバッグを持ち替えた。道具類が詰まっているので、ずっしりと重たい。真也がそっと手をのばしてきてバッグの把手を握った。ちょっとだけ重みがやわらいだ。二人は目を合わせて微笑んだ。
「ありがとう、助かるよ」
井上さんは少し指をずらし、力をゆるめて言った。
「どうだ、重たいだろ？」
「ううん、だいじょうぶ。……網棚にのせないの？」

「そうだよ、だいじな道具が入ってるんでね」
真也はうなずいて見せたが、じきに手の位置を変えようとした。細い指が白くなっている。井上さんは、ふたたび手に力を込めた。
「もういいよ、ひとりでだいじょうぶだ」
「重たくないってば。……チビより、ずっと楽だよ」
「ほう、そうかね」
「チビが引っ張る力、すごかったんだから。手がしびれちゃうぐらい」
「あいつは図体がでかかったからなあ」
「あんなに元気だったのにね。……急に死んじゃうなんて」
と言って、真也はうつむいた。また悲しみがぶり返したようだ。
井上さんは鞄の重みが徐々に増していくのを感じた。
「真也くん。……チビはフィラリア症でなかったとしても、そんなに長くは生きていられなかったんだよ。なにしろ人間ならリーリより年寄りだったんだから」
「でも、ぼくんちへきたばかりのときは、とっても元気だった。それに、じゃれて遊ぶのが大好きだったんだ。ぜったい年寄りなんかじゃなかったよ」
「あいつは、いたずら好きで、いくつになっても、やんちゃ坊主だったからな」
井上さんはドアの外を眺めた。冬陽に光る家々が素早く走り去っていく。
「でも、あいつは人間の年齢でいえば、とっくに七十歳をこえた年寄りだったんだよ」

「じゃあ、リーリも七十歳をこえたら年寄りになるの？」
「いまでも充分に年寄りさ。髪の毛は白いし、顔も身体じゅうの皮膚も皺だらけだし、歯もだいぶ抜けてる。……だがな、リーリは見かけとは大ちがいだぞ」
「リーリは元気だもんね、ぼくと一緒に駆けっこもするしさ」
「そうだとも、リーリの中身は若いんだ。いいかね、真也くん、年とった人を心のなかまで老人だと思ったら、それは大まちがいだぞ」
いつのまにか井上さんの声に熱がこもっていた。自分では知らないうちに、それまでよりも声高になっている。まわりの人びとが、うさんくさそうな目を向けてきた。
「わたしも若いときは、老人を体力ばかりか心まで衰えた人間なんだと思っていたけど、自分が年老いてみて初めてわかったんだ。……この頭のなかじゃ、自分の姿を若いときと同じように思い描いているんだよ」
だから、ときどきびっくりすることがある。たとえば街のなかを歩いていて、とつぜんショーウィンドーに映った自分の姿に行き合ったときだ。向こうから、じっと見つめている男が自分だということは、もちろんわからないわけではない。しかし、それを自分に認めさせるには、少しだけ時間がかかる。
もちろん毎朝、鏡に向かって髭を剃っている。そんなときは、まったく問題ない。おそらく、ふいに街なかで出会うのとは異なって、白い髭ののびている見慣れた顔をすでに予測しながら鏡に向かうからにちがいない。

「でも、ときどき思い知ることになるんだ。ちょっとした段差でつまずいたり、知っているはずの名前を思いだせなかったり、手元にあるものを探していたりするときにね」

と言いながら、井上さんは苦笑していた。電車のなかで孫を相手に、こんなことをしゃべっているのに気づくときも、やはり年老いたことを思い知らされる。

「言いたいのはな、真也くん。……こんなに元気で、心のなかで自分を若いと思い込んでるリーリだって、いつまでも生きてられないってことさ。それを覚悟しとかにゃな」

「いまにリーリも死んじゃうんだね、チビみたいに」

真也は悲しげな声でつぶやいた。その目はドアの向こうを見つめていた。ちょうどガラスの向こうを下り電車が行きちがいに通過していった。

「そういうことだ。……どんなに元気だと思っていても、いつか、自分のそばからいなくなってしまう。それは、だれもが何度か経験しなきゃならないことなんだよ」

と、井上さんは努めて明るく言った。

いつのまにか乗客の数が増えていた。話しているうちに、いくつかの駅に停車して、反対側のドアから乗ってきたのだろう。

準急に乗ったのだから、ほどなく私鉄の終点に到着するはずだ。そこから、さらに二人はJR線に乗り換えていく。

ひとりごと ● 話してわかったこと

とつぜん一緒に行こうってリーリに誘われたとき、ぼくは正直なとこ、まいったなあって思ったんだ。今日は部屋を一歩も出たくない気分だったし、下へ降りてってパパやママと顔を合わせるのもいやだった。

部屋にいれば、チビのことをいろいろ思いだせるし、悲しいけど不思議に落ち着くし、一日じゅう泣いててもいいなと思ったりもしてたんだ。

でも、リーリと話しているうちに、あっと思った。

チビが死んで悲しいのは、ぼくだけじゃなくて、きっとリーリもなんだ。もしかしたら、ぼくより長くチビと暮らしたんだから、もっともっと悲しいのにちがいない。

ぼくがリーリの腰かけているベッドのそばを指さして、「チビ、おとといの朝まで、そこに寝てたんだ」と言ったときの、リーリのつらそうな顔ったらなかった。

すぐ誘いにのったのは、それがあったからだ。リーリと一緒なら、今日一日、なんとか沈んだきりにならないですごせそうだって思った。ほんとは、こっちがリーリを

慰めてあげなきゃなんないんだって、じつは気がついたのさ。

ところが、リーリは電車のなかで、いきなりむずかしいことを話しだしたんだ。

なんだか声まで、ばか高くなっちゃって、ほんとまいっちゃったよ。だって、まわりの人たちが、おかしなじいさんが乗ってるぞって感じで、みんなリーリを見てるんだもん。ぼくだって、じろじろ見つめられちゃって、ドキドキしたよ、まったく。

でも、リーリの言ってることは、なんとなくわかった。

だれでも、いつか、かならず死んでしまう。いまは元気でも、きっと、そのときがやってくる。それを、自分も、まわりの人も、ちゃんと覚悟してなきゃダメなんだ。

ぼくだって、そのぐらいのことは、とっくに知ってるつもりだった。でも、あんなふうに、はっきり言われたのは初めてだ。だから、ちょっとショックだったな。

しかも、電車のなかだもの。もっと静かなとこで話すことだったんじゃないかな。ほんとにリーリって、いつものことだけど、ひとを驚かすのが得意なんだから。

でも、JRの電車に乗り換えてから、リーリは前ほどしゃべらなくなった。ひょっとしたら、電車のなかで話すことじゃなかったって、気がついたのかもしれないね。

途中から座席が空いたんで、ぼくらはならんで腰かけた。リーリは革のバッグをひらいて、なかを覗かせてくれた。こないだ近藤さんの椅子を直してたときにも見たような、いろんな道具が入ってた。カナヅチやノコギリは知ってる。だけど、ノミやカンナやサシガネなんかを近くで見たのは初めてだった。

助手になってくれって言われたけど、どんなことをすればいいのかな。ほんとに、ぼくにもできるのかな。

黒光りする道具を見てるうちに、なんだか緊張してきちゃった。

それでさ、いよいよ目的の家に行ってみたら、すっごいことが待ってたんだ。